

# 日本災害情報学会「廣井賞」「阿部賞・河田賞」

(廣井賞表彰審査委員会幹事 岩田孝仁)

2014年表彰式・受賞記念講演：2014年10月26日 新潟県長岡市（アオーレ長岡）

## 1. 表彰式

災害情報分野で著しい功績のあった会員又は会員所属団体等を表彰する「廣井賞」及び「阿部賞・河田賞」の表彰式と受賞記念講演が行われた。

今年度の「廣井賞」には社会的功績分野において株式会社サーベイリサーチセンターが選ばれ、賞状と賞牌が授与された。

また、今年度から学会大会での優秀発表者に対し若手奨励賞が新設され、優秀なポスター発表に「阿部賞」が、優秀な口頭発表に「河田賞」が授与された。

表彰式は、布村明彦会長の挨拶に続き、廣井賞表彰審査委員会の田中淳委員長から選考の過程と受賞者の紹介が、入江さやか氏の軽快な司会進行で行われた。

### ◆廣井賞「社会的功績分野」 「被災者に寄り添う社会調査」

株式会社サーベイリサーチセンター

災害時における社会調査の草分け的な存在として、36年の長きにわたり一貫して被災者や被災地に寄り添う姿勢を貫いて災害情報研究の進展を支える社会調査を続け、その活動は、本賞の由来する故 廣井脩先生の災害情報研究とも歩みを共にし、社会調査専門会社としての枠を超え災害情報研究の発展に大きく貢献してきた。



### ◆若手奨励賞「阿部賞」「河田賞」

「阿部賞」は、ポスター発表会場における学会員の投票で、以下の4名に贈られた。

- ・本間基寛 (京都大学)：不確実性を伴う災害情報の表現方法に関する検討—大雪情報を事例として—
- ・横幕早季 (静岡大学)：防災実務者を対象とした人材育成講座の構築～修了1年後アンケート結果を踏まえて～
- ・桑原健悟 (関西大学)：避難時の心得における挿絵と説

明文の対応関係について

- ・石井雄輔 (東洋大学)：洪水時の住民避難特性に関する国際比較分析

「河田賞」は、口頭発表会場の各座長と廣井賞表彰審査委員らの選考で、以下の5名に贈られた。

- ・廣井悠 (名古屋大学)：東日本大震災時に発生した地震火災に関する質問紙調査
- ・岡田夏美 (関西大学)：小学校の教科書における防災学習内容の量的分析
- ・金井昌信 (群馬大学)：東日本大震災以後の学校防災教育の現状—効果と課題—
- ・中川政治 (みらいサポート石巻)：被災地の震災伝承におけるAR技術活用の取り組み—石巻市における「防災まちあるき」実践事例—
- ・中居楓子 (京都大学)：津波避難計画における実行可能性の検討



## 2. 「廣井賞」受賞記念講演

### (1) 「被災者に寄り添う社会調査」

株式会社サーベイリサーチセンター 石川俊之

このたびは栄えある廣井賞をいただき誠にありがとうございます。災害や防災関連の調査機関といたしまして、身の引き締まる思いであります。

本日は廣井先生からのお教を含めて3点お話しさせていただきます。まず、なぜこの自主調査を始めたかということです。次に、東日本大震災では現地での調査に関して非常に残念なことがございましたので、それを踏まえて調査上留意している点。最後に、私どもの自主調査の事例を報告させていただきます。

私どもの今回の廣井賞受賞のきっかけが「災害時の自



主調査の実施」ということで、この活動を評価いただいたことは誠にありがたいことです。私どもの防災・災害関係の調査の始まりは昭和54年です。災害時の自主調査につきましては平成7年の阪神淡路大震災直後に廣井先生からいただいた一言から始まっています。廣井先生からは、「災害に関わる調査会社として、今調査しないといけないのではないか。研究者が躊躇している段階では、おまえのところがやるしかないよ」との助言をいただきました。これをきっかけに、自主調査を始め、これまでに各種災害時に25事業を実施しました。この内、阪神淡路大震災では3回、三宅島の帰島住民調査で4回、東日本大震災では3回パネル調査として実施しています。こうした自主調査結果は、自社ホームページやマスコミでの発表、自治体や研究機関へ報告書の配布、東京大学のデータアーカイブセンターにも提供しております。

弊社の災害時の自主調査のコンセプトは、「素早く継続的に、そして速やかに公表」です。このコンセプトを基本に実施しております。ただし、素早くやれば良いというだけではありません。冒頭申し上げましたように、東日本大震災の被災地では調査に関するいろいろな課題がありました。一例をお話しさせていただきます。東日本大震災直後に、ある国の調査を実施するに当たり、そのプリテストのお願いに被災自治体に訪問したときのことです。その自治体には既にある機関が調査に入っており、自治体のご担当から、「その調査機関が聞いてはいけない質問を被災者の方に聞いてしまい、被災者の方が訴訟を起こしたいと言っている」、とお話しがありました。その結果、こちらがお願いするプリテストは了承いただけませんでした。こうした問題は被災者の身になればあってはならないことです。

東日本大震災の被災地には、多くの機関が調査に入りましたが、我々が調査に入るときに留意している点を改めてお話ししていきます。

まず、現地をよく知ること。それから、現地の環境を理解し、現地で協力いただける方の協力を得ること。これがポイントだと思っております。私どもは事務所が本社以外に9つございます。この事務所から現地の状況を確認し、自治体や自治会への依頼を行います。それで、私ども本社のほうで、いろいろな機関へのご協力をお願いして、調査の設計をしていきます。

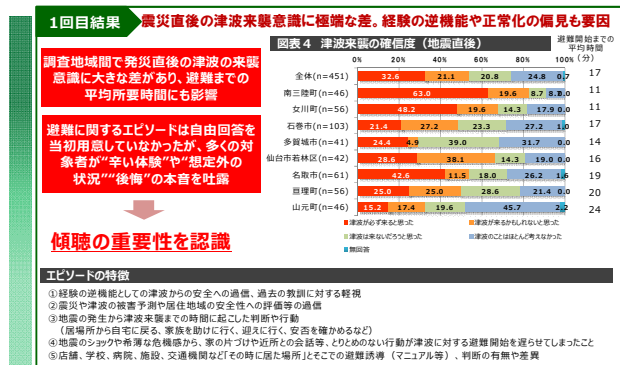
調査にあたっては調査員に対し、次のようなインストラクションを行っております。まず1番目に現地の状況を詳しく説明します。次に、協力者から被災者の方の現状の説明をしていただきます。それから、調査員は聴き取りすることが多いので、地名や公共施設の名称等の説明を受けます。

災害調査においては、この聞き取ること即ち、「傾聴」が重要だと思っております。弊社の調査員には傾聴トレーニングを実施し、聞く事の留意点を考慮してこれまで調査を実施してきました。この「傾聴」のきっかけとな

った自主調査結果を例に、「傾聴調査」を紹介させていただきます。

東日本大震災の自主調査が「傾聴調査」のきっかけです。1回目の調査で、震災直後の津波来襲意識に極端な差があったということが分かりました。正常化への偏見等が要因であるということで、グラフで示しましたものが津波の来襲確信度で、発生直後に必ず津波が来ると思った割合に顕著な差がありました。南三陸とか女川は必ず来ると思っていた方が多く、石巻市や山元町は津波が必ず来るという意識が他よりも低いということで、これは避難の平均時間にも関係する結果になりました。

## 10 自主調査の結果から—東日本大震災②



この時の調査は全て構成設問で組み立てました。しかし、実は数多くのエピソードをお話しとしていただいております。この段階でよく話していただけるなどというようにお話しも多くあり、「傾聴の重要性」を強く意識しました。そこから「傾聴調査」という手法をとることにしています。

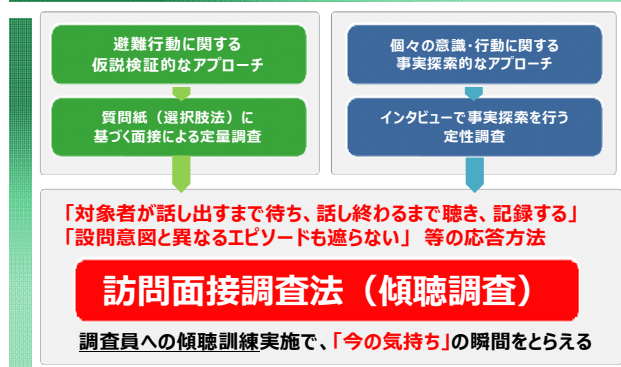
その中で、印象的なお話としては、石巻の50代の男性から「地震直後避難せずに家の後片付けをしてしまった。気付けば津波がゴーという音と共に襲来してきて、自分は家の2階に避難した。1階には足が不自由なご両親と奥様がいた。気がついたときには、もう津波が中に入ってきて、自分は2階から1階に何で手をさしのべなかったのか、声をかけなかったのか、私はこの後悔を一生背負って生きていくんだ」というようなお話をいただきました。なかなか聴こうと思っても聴けないようなお話ですけれども、聴く態度や対応を整えればそういうお話しが聴けるのだなということで、傾聴の重要性を確認しました。

通常ですと、訪問面接では質問の順番を変えて聴いてはいけないという調査指示をいただきます。しかし、被災地で調査していると、突然対象者の方が、堰を切ったようにお話しいただくタイミングがあります。どこでそういうタイミングが発生するのかわかりませんが、基本的な調査の流れよりも、対象者に寄り添って今の気持ちを聴くという対応、こういったものが非常に重要になります。

調査では、質問紙による定量調査とインタビューで行う定性調査というのは別々に行うものですが、これらを合わせて、弊社では「傾聴調査」としております。対象者がお話しいただけるまで待ち、話し終わるまで聴き記録する。設問の意図と異なるエピソードでも「それはあとでまた聴きます」というような一旦遮るようなことはしません。こういう調査の方法を「傾聴調査」と弊社では呼ばせていただいており、調査員にもかなりの訓練が必要になります。

## 12 訪問面接調査(傾聴調査)の考え方

SRV サルベージリサーチセンター  
SURVEY RESEARCH CENTER



2014/10/26

Survey Research Center

17

この傾聴調査を実施しますと、調査員もかなり心のダメージを受けます。また、一方で対象者から調査員に対する大きな期待も受けます。ある事例をご紹介します。気仙沼の仮設住宅にお住まいの80歳代の女性から、弊社の若い調査員にいただいた言葉です。「なぜあなたの調査に私が協力するのか理解して欲しい。私はありのままをすべて話すから、あなたの口からあなたの世代の人たちにこの地震を伝承して欲しい」。このことは、決して調査内容を全部話せというような事ではありません。「あなたが感じたことを、あなたの世代に、あなたの口から話して欲しい」ということです。これは調査結果をうんぬんということではなくて、必ず伝承して欲しいということだというように理解しております。

このように、被災者と接して多くのことを学びます。弊社は今後もこうした被災者に寄り添う調査を大事にしていきたいと思っております。

最後に、廣井先生には会社としても個人としても本当にお世話になりました。今後とも防災・災害調査を通じて、社会に必要な会社でありたいと思っております。今後も精進していきます。ご静聴ありがとうございます。